

2025. 3. 25



三重営農情報

No. 217

J A全農みえ 営農対策部

● 目 次 ●

トピックス

- **令和6年度 麦作共励会知事賞表彰式を開催** 1
令和6年10月25日、令和6年度三重県麦作共励会（知事賞）の表彰式がJ A鈴鹿本店で開かれ、受賞された生産者とJ A、県関係機関、J A全農みえの担当者が出席して受賞を讃えました。
- **第38回 三重県いちご共進会を開催** 2
令和6年12月19日、J A三重ビル（5階）で第38回三重県いちご共進会を開催しました。県内6 J Aから出品された「かおり野」、「章姫」、「うた乃」など114点の中から、農林水産大臣賞をはじめとした各賞を選定しました。
- **令和6年度三重県出向く活動パワーアップ大会を開催** 3
令和6年12月12日、津市プラザ洞津でJ Aの担い手に出向く活動担当部署の担当者・管理者など関係者約48人の参加の中、J A担当者の活動の成果を共有して、相互研鑽とモチベーション向上をはかり、担い手との信頼関係を継続・醸成するためのスキルアップを目的とした大会を開催しました。
- **水稻育苗技術研修会を開催** 4
令和7年2月21日、J A三重研修所で、J A水稻育苗施設管理者及び担当者を対象として、水稻の品種特性・育苗技術・種子の発芽の留意点・温湯消毒方法の基本など育苗に関する技術研修会を開催しました。

特集 1

三重県の加工かぼちゃの推進について 5

三重県中央農業改良普及センター 普及企画室 地域農業推進課

主査（農業革新支援専門員） 増田 実 氏

特集 2

全国麦作共励会 農家の部『日本農業新聞会長賞』受賞！

三重県亀山市 宮坂利樹さんの経営紹介 9

三重県四日市鈴鹿地域農業改良普及センター 鈴鹿普及課

主査 水谷 祐真 氏

三重県麦作共励会知事賞表彰式を開催しました

J A全農みえでは、令和6年度の三重県麦作共励会を行い、県知事賞に輝いたJ A鈴鹿管内の亀山市宮坂利樹さんを表彰しました。令和6年10月25日にJ A鈴鹿本店で表彰式を開催し、三重県農林水産部農産園芸課加藤吉彦班長から表彰状とトロフィーを授与していただきました。

同共励会は、生産技術や経営改善の面から先進的で他の模範となる麦生産経営体を表彰し、いっそうの生産振興を図ることを目的に開催しています。本県では需要に応じた5品種が作付けされていますが、本年度の出品については、結果的に審査対象が「あやひかり」のみとなりました。

同生産者は、排水性の悪い圃場もあるなか、対策を徹底するとともに継続的な堆肥利用で土づくりの強化に努めたほか、農業用ドローンを利用した赤カビ病防除では、作業の効率化と適期作業で防除効果を高めました。このような基本技術の徹底によって収量・品質の向上に努める「地域を代表するモデル的な経営体」として評価され、今回の受賞につながりました。

利樹さんの孫の龍翔さんは、「今年は悪天候に苦しんだが、祖父とほ場環境の改善や麦の品質向上に取り組んできたので、知事賞を受賞することができ、非常に嬉しい。今後も基本的な農業技術の習得や農業用ドローンの活用による作業時間・労働の軽減化をすすめ、さらなる収量の拡大、品質の向上をめざして、地域全体の麦作を盛り上げていきたい」と抱負を話しました。

なお、今回、県知事賞を受賞された宮坂利樹さん（亀山市）さんにおかれましては、東海近畿ブロック麦作共励会の農家の部でブロック1位となり、令和6年度全国麦作共励会に推薦され、令和6年12月20日の中央審査会で『日本農業新聞会長賞』を受賞されることが決定しました。おめでとうございます。



知事賞を受賞された宮坂龍翔さん
(利樹さんのお孫さん)



表彰後の懇談

第38回三重県いちご共進会を開催しました

三重県園芸振興協会（事務局＝ＪＡ全農みえ営農対策部）は１２月１９日、津市のＪＡ三重ビルで「第３８回三重県いちご共進会」を開きました。審査の結果、最高位の農林水産大臣賞に、ＪＡ多気郡の中村淳さん出品の「かおり野」が輝きました。

共進会は、本県を代表する園芸特産物のひとつ、イチゴの栽培技術の向上と消費拡大を目的に、毎年開催しています。

県内６ＪＡから主力品種「かおり野」「章姫」や新品種の「うた乃」など計１１４点の出品がありました。県中央農業改良普及センターや県農業研究所、県内卸売市場の関係者４人が、形状や着色、玉ぞろいなどの外観と、糖度や食味などの内容を審査し、総合評価で各賞を決定しました。

今年産は、昨夏を上回る猛暑の影響で例年に比べ生育が遅れたものの、１２月に入り寒さが増したことで食味良好なイチゴとなっていました。また、本県が約３０年をかけて育種した新品種「うた乃」も今期から本格的な栽培・出荷販売がスタートしました。

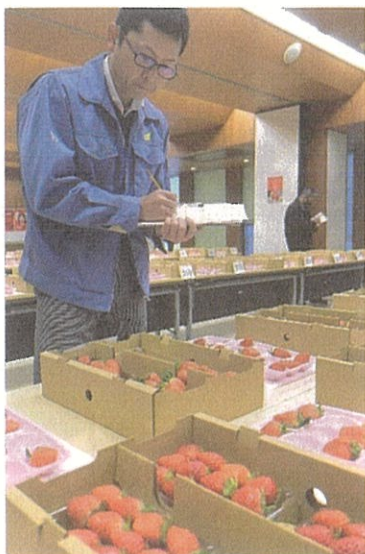
「三重いちご」の出荷販売は、５月末ごろまでを見込んでいます。

共進会の主な入賞者は次のみなさまです（敬称略）。おめでとうございます。

▽農林水産大臣賞＝中村淳さん（ＪＡ多気郡）「かおり野」

▽知事賞＝中西政弘（ＪＡ伊勢）「かおり野」

▽東海農政局長賞＝川西由香（ＪＡみえなか）「章姫」



三重県出向く活動パワーアップ大会を開きました

J A全農みえ営農対策部は12月12日、津市のプラザ洞津で「三重県出向く活動パワーアップ大会」を開き、J Aの出向く担当部署の担当者・管理者、J Aグループ関係団体、県普及指導員など48人が参加しました。

本大会は、地域農業の担い手に出向くJ A担当者の活動成果を共有し、相互研鑽とモチベーション向上をはかり、担い手との信頼関係を継続・醸成するためのスキルアップを目的に毎年開催しています。

県内の農業経営者の講演では、J A多気郡管内でレンコン栽培を行う就農3年目の坂津舞樹さんが登壇しました。

県内では珍しいレンコン栽培のメリットや栽培体系、収穫・出荷作業の状況を紹介。2年目に収量低下や面積拡大に伴う労働力不足の課題に直面した際、J Aや県普及機関のサポートを受けて作業体系や労働配分、出荷計画などの見直しに取り組んだことを報告しました。坂津さんは、J Aグループに対し新規就農者への積極的な関わりを期待し、今後、県内でレンコン栽培に取り組む仲間を増やし、県認定の「三重ブランド」をめざしたいと力を込めました。

県内の出向く活動事例として、J Aみえきたからザルビオを用いた営農指導について報告しました。地力マップ・生育マップの配布や生育ステージ・病害アラートの通知、自動可変施肥の提案など、ザルビオによる生育状況の情報を活用することで施肥作業時間の削減や適正施肥につながったと話しました。

県外の出向く活動優良事例では、熊本県天草市のJ A本渡五和からT A C活動について報告しました。J A単独による地域営農組織の連絡協議会の運営や、J A職員による休日を利用した農作業支援事業、全農や熊本経済連と連携したスマート農業への取り組みなど、地域活性化に向けた活動を報告しました。

このほか、全国の「T A C・出向く活動パワーアップ大会2024」での「T A C部門 担い手営農サポートシステム特別表彰」の受賞者5人の表彰、全国の担い手アプローチ事例の紹介を行いました。



三重県水稻育苗技術研修会を開催しました

令和7年2月21日午後、JA三重研修所（津市森町）で、県下のJA育苗施設管理者及び担当者、営農指導員、県関係者等34名（会場参加22名、オンライン参加12名）の参加の中、水稻育苗技術研修会を開催しました。

近年、地球温暖化の影響による気候変動等で健全な水稻育苗が難しい状況になっています。この状況は、今後も続いていく可能性が高いことが予想され、米の品質への影響が心配されているところです。このことを受け、水稻の品種特性・育苗技術・種子の発芽の留意点・温湯消毒方法の基本など育苗に関する基本的な技術研修会を開催しました。

研修内容としては、

○【報告】近年のJA水稻育苗施設巡回における傾向について

JA全農みえ 営農対策課

技術主管 前橋 善浩

①【会場講演】水稻の品種特性（育苗）について

講師：三重県農業研究所 生産技術研究室農産研究課

主査研究員（課長代理）松本 憲悟 氏

②【会場講演】水稻の育苗技術について

講師：三重県中央農業改良普及センター 普及企画室地域農業推進課

主査 内山 裕介 氏

③【会場講演】水稻種子の発芽の留意点、種子の需給状況等について

JA全農みえ 営農対策課

技術主管 前橋 善浩

④意見交換（育苗施設等における課題問題などについて）

などの講演があり、会場・オンライン参加の出席者のみなさんから活発な質問・意見が出され、水稻育苗に関する技術向上など研鑽を図る研修会となりました。



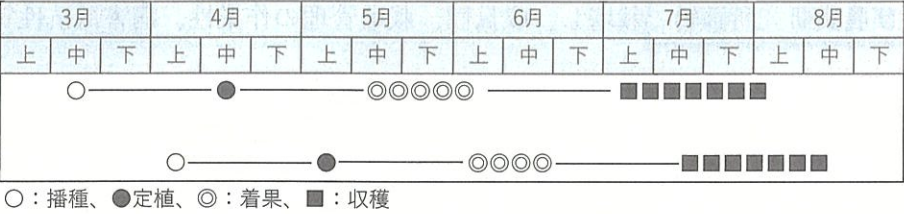
三重県のかぼちゃの推進について

三重県中央農業改良普及センター 普及企画室 地域農業推進課
主査（農業革新支援専門員） 増田 実

1. 県内のかぼちゃの生産状況

三重県におけるかぼちゃの作型は露地普通栽培が中心で、主に4月～5月にかけて定植され、北海道産の販売がメインとなるまでの7月～8月にかけて出荷されています（表1）。

表1 三重県におけるかぼちゃの作型



県内の主なかぼちゃの産地は鈴鹿地域及び伊勢地域です。鈴鹿地域では茶や花き生産者が複合品目の1つとして「加工かぼちゃ」を生産しており、生産物はJA全農みえ（以下、「全農」と記す。）を介して加工業者等の実需者に販売されています。一方、伊勢地域では露地野菜生産者等が主に「生食用かぼちゃ」を生産しており、生産物はJA伊勢、全農を介して市場出荷されています。

加工かぼちゃは販売先の需要が高いことから、三重県では令和4年産以降、全農、各地域のJA、普及センター（以下、「普及」と記す。）等の関係機関で連携して作付推進を図っています。

表2 令和6年産加工かぼちゃの面積及び出荷量

JA	面積 (a)	出荷量 (kg)
みえきた	130	6,189
鈴鹿	1,110	133,941
津安芸	82	5,635
みえなか	111	9,720
多気郡	30	1,875
伊勢	65	20,003
いがふるさと	129	6,018
合計	1,657	183,381

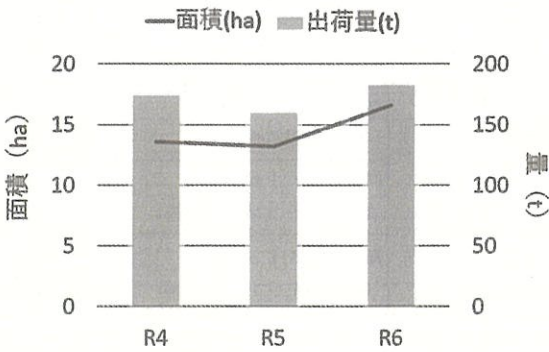


図1 加工かぼちゃの面積及び出荷量の推移

2. 推進状況

(1) 土地利用型水田農家への作付推進

これまでは、茶生産者、花き生産者等の複合品目として、または露地野菜生産者の栽培品目の1つとして、加工かぼちゃの推進を行ってきました。令和6年産では、産地の一層の拡大を図るため、新たに土地利用型農家（以下、「水田農家」と記す。）を推進対象に加え、JAと普及で野菜作りに関心が高いと思われる水田農家等を選定し、作付けの提案を行った結果、いくつかの水田農家が5a～10a程度の小面積で試験的に着手していただきました。

しかし、水稻の田植え前後の管理と、かぼちの育苗、定植、誘引、防除等の初期の重要な管理が重なり、かぼちの管理が手薄となり、十分な収量を確保することができませんでした。また、機械作業に慣れている水田農家にとっては、誘引等の手作業による管理が大きな負担になっている様子で、『かぼちは簡単』という認識で取り組んでみたものの、予想以上に手間がかかったため、次の作はやめる。」という生産者が多く見られました。

このように、水田農家への加工かぼちの導入は、既存の栽培体系では困難であり、省力・軽労化及び簡素化が重要な課題であることを認識しました。

(2) 品種の検討

三重県内で加工かぼちとして栽培されている品種（以下、「現行品種」と記す。）は主に「蔵の匠」となっていますが、令和6年産は、より収量性の高い品種の選定に向け、新たに6品種について、生産現場及び農業研究所圃場で栽培し、収量性、栽培管理の作業性、病害抵抗性等の評価を行いました。

その結果、現行品種よりも高収量が見込める品種、短節間で草姿がコンパクトなため管理しやすい品種、うどんこ病に強い品種等、取扱品種として有望な品種を確認することができました(表3)。一方、栽培方法は、現行品種に合わせて一律としたことから、一部の品種については、草勢が弱い等、品種本来の力が発揮されませんでした。

表3 農業研究所圃場における品種試験結果概要

試験品種 (種苗会社)	単収※ (kg/a)	生育	果実
R2-869 (トキタ種苗㈱)	236	・草勢はおとなしい	・やや甲高
グラッセ (タキイ種苗㈱)	187	・草勢はおとなしい ・うどんこ病の発生は少ない	・やや扁平
マロンスター139 (朝日アグリ㈱)	361	・非常に短節間 ・着果が安定	・球形 ・果実が大きい ・滑らかな果皮
グラン・モンブラン (ナント種苗㈱)	337	・節間が長め	・扁平 ・凹凸のある果皮
MKS-K1619 (ヴィルモランみかど㈱)	231	・非常に短節間 ・着果が安定	・標準的な果形
MKS-K1586 (ヴィルモランみかど㈱)	391	・低節位(株元)への着果は少なく、適正位置に着果しやすい	・揃いが良い
蔵の匠(現行品種) (ヴィルモランみかど㈱)	192	・着果が安定	・揃いが良い

※ 1本仕立(栽植密度71本/a)で、不良果を除いた収量を単位面積に換算したもの。



写真1 短節間な品種



写真2 玉肥大の良い品種

(3) J A及び普及を対象とした現地研修会の開催

加工かぼちゃを推進するためには、推進する側が、加工かぼちゃの生理や栽培管理について理解し、現場で適切な指導を行う必要があります。令和6年産では、全農と普及が共催する形で、J A営農指導担当者及び普及指導員を対象とした現地研修会を開催しました(表4)。若手の出席が多く、基本的な知識・技術を学ぶ良い機会となりました。

表4 研修会の概要

	開催日	内容	参加人数
第1回	5月1日	・種苗会社からの品種特性の説明 ・栽培のポイント説明 ・定植実習	J A : 21名 普及 : 17名
第2回	6月28日	・現地圃場視察	J A : 12名 普及 : 12名



3. 今後の取組

(1) 三重県型加工かぼちゃ栽培体系の確立に向けて

既述の通り、水田農家等に加工かぼちゃを推進していくためには、栽培体系の省力・軽労化及び簡素化が重要な課題です。令和6年産終了後、三重県の野菜産地振興について関係者で検討する会議(三重県野菜産地振興プロジェクト会議)や、全農主催の反省会等の場で、栽培体系の省力・軽労化及び簡素化のために検討すべき対策を出し合いました(表5)。

今後は、現地実証等を通じて、これらの対策1つ1つについて関係者で検証し、「三重県型加工かぼちゃ栽培体系」を確立し、加工かぼちゃの産地拡大を図りたいと考えています。

表5 省力・軽労化及び簡素化に関する課題と検討すべき対策例

課題	検討すべき対策例	取組状況
育苗の省力化	・育苗の委託	一部のJ Aが、苗の生産・販売を行っている。
	・小苗定植	R 7年産に一部で試験を予定している。
摘芯の省力化	・定植前摘芯	R 6年産は定植後摘芯を推奨していたが、R 7年産からは定植前摘芯を推奨する。
	・密植放任栽培	一部で実施されているが、技術の確立には至っていない。
べた掛けの省力化	・定植時期の繰り下げ	今後検討していく。
追肥の省力化	・全量基肥施肥	実証中であるが、技術の確立には至っていない。
誘引の省力化	・密植放任栽培	一部で実施されているが、技術の確立には至っていない。
敷き藁及び除草の省力化	・リビングマルチ(マルチ麦)	導入する生産者が増えている。
管理の簡素化	・1果どりによる作の短期化	今後検討していく。
	・短節間品種の導入	短節間品種に適した栽培体系を検討中。
防除の省力化	・ドローン防除の受委託	一部で実施されており、今後拡大が期待される。
	・耐病性品種の導入	実証中であるが、草勢確保の対策が必要な状況。
箱詰め省力・軽労化	・コンテナ出荷	一部で実施されており、今後拡大が期待される。
片付けの省力化	・生分解性マルチの使用	一部で実施されており、今後拡大が期待される。



(2) 単収の向上に向けて

加工かぼちゃで経営メリットを発揮するためには、単収 2t/10aを目指す必要があります(表 6)。

表 6 経営試算 (10a 当たり・2 本仕立)

単位：円

収益			特大(9%)	大(75%)	小(14%)	特小(2%)	全体
	収量		180kg	1,500kg	280kg	40kg	2,000kg
	kg単価		152	152	102	90	-
	収益		27,360	228,000	28,560	3,600	287,520
	合計		287,520				
経費	種苗費	種子	320粒				10,484
	消耗品費	農薬					17,285
		肥料					22,250
		育苗培土					12,830
		生分解性マルチ	200m				16,000
		べた掛け不織布	200m				15,000
		マルチ麦	4kg				4,600
		燃料					10,000
		その他消耗品（手袋等）					5,000
	諸材料費	電熱マット（耐用年数 7 年想定）	1.6㎡×2セット				5,714
		スピードポッター（耐用年数 7 年想定）	1台				3,714
		ポリポット（耐用年数 3 年想定）	320個				533
		その他諸材料（移植ごて、ペグ、収穫ハサミ）					10,000
	出荷経費	鉄コン利用料	鉄コン 6 基				3,000
		運賃	鉄コン 6 基				18,000
		出荷手数料					13,370
	合計（減価償却費・修繕費を除く）		167,782				
所得	119,738						

※ 上記試算には、トラクター等の農業機械や育苗ハウス等の減価償却費、修繕費及び人件費を含まない。

しかし実際は、既存生産者、新規栽培者含め、生産者間で単収に大きな差が見られる状況となっており、2t/10a程度の生産者もいれば、500kg/10a程度の生産者も見られます。

令和 6 年産に、全農、J A、普及でこまめに栽培状況の共有・反省を行いながら、現地指導に取り組んだ結果、単収を確保するために重要なポイントが明確化してきました。令和 7 年産以降、これらのポイントを押さえた指導を行うことにより、加工かぼちゃに取り組むメリットを感じてもらえる生産者を増やしていきたいと考えています。

【単収確保に向けた栽培のポイント】

- ☐ 育苗時の控えめな灌水、鉢ずらし、適期定植による苗の徒長・老化防止
- ☐ 土壌が膨軟な圃場の選定
- ☐ 4 月中に定植を完了させることによる着果安定
- ☐ 定植前摘芯による管理遅れリスク低減
- ☐ 積極的な施肥による草勢確保
- ☐ 生育初期からの継続的なうどんこ病防除

全国麦作共励会 農家の部『日本農業新聞会長賞』受賞！ 三重県亀山市 宮坂利樹さんの経営紹介

三重県四日市鈴鹿地域農業改良普及センター
鈴鹿普及課 主査 水谷 祐真

1. 地域農業の概要

亀山市の耕地面積は約1,740haで、そのうち水田は約1,190haです。農業経営体数は516戸で、うち主業が43戸となっています。

基幹的農業従事者の年齢構成は、若年層が少なく、70～74歳が最も多くなっており、65歳以上の農業従事者の割合は全体の約84%と高くなっています。

米を主体に転作作物としての小麦・大豆、施設を利用した花き花木のほか、肉用牛を中心に畜産業も盛んです。また、気候や土質が栽培に適していることもあり古くから茶の生産が盛んで、全国でも有数の生産量を誇る三重県において、市町別では第3位の生産量となっています。

2. 宮坂氏の経営概況

宮坂氏は36歳のとき就農し、現在は妻・孫の3人で農業経営を行っています。三重県亀山市川崎地区で水稻・小麦・大豆の作付体系を取り入れた専業農家であり、JA鈴鹿受託者部会に加入するなど地域農業の中核農家およびリーダーとして活躍しています。経営内容は水稻19ha、小麦28ha、大豆27haであり、大豆については小麦跡のほぼ全てのほ場で作付けを行い、農地の有効活用を図っています。地域の農地保全への思いが強く、年々増えている農地管理の委託要望に応えているため、経営面積は拡大を続けているところです。



そこで、水稻では早生から晩生まで複数の品種を栽培することによる作期分散やドローンの活用により防除の効率化を図ることで、市内でも最大の農業経営規模を誇っています。

麦作については、三重県特産品の伊勢うどん等の原料として県内製粉会社からの需要が高い「あやひかり」を全面積で栽培しています。10a当たりの収量は、過去4年間の平均で432kg（令和6年383kg）と県の過去4年間の平均単収335kg（令和6年242kg）を大きく上回っている状況です。

最近の後継者育成に注力しており、主な機械作業については、就農3年目となる孫の龍翔さんが中心に行っています。龍翔さんは鈴亀地区（鈴鹿市、亀山市）の若手農業者で構成さ

れる農業青年クラブの会員であり、収穫体験イベントの開催や食育活動など積極的に地域の農業振興に携わっています。

表 1 小麦生産概要

年産	品種	作付面積 (a)	単収 (kg/10a)	
			宮坂氏	県平均
R 4	あやひかり	2,491	476	357
R 5	あやひかり	2,824	477	392
R 6	あやひかり	2,841	383	242

3. 技術・経営上の特色

(1) 排水対策

小麦栽培における排水対策は、収量・品質向上を図る上で重要な基本技術と位置付けています。稲刈り終了後、早期に額縁明渠を施工し、乾きやすいほ場づくりを行っています。明渠の深さは排水口の高さに合わせるとともに明渠同士を確実に繋ぐことで雨水が停滞せず速やかに排水されるよう、細心の注意を払って施工しています。また、機械作業だけに頼ることなく、頻繁にほ場を見回り手作業で補修を行うなど、栽培期間を通じて排水能力が維持されるよう取り組んでいます。

さらに排水不良田では自力で暗渠を施工することで、ほ場条件の改善に努めています。



写真 1 額縁明渠と中明渠のつなぎ

(2) 土壌改良

宮坂氏のほ場では過去に水田の高度利用によるpH低下 (pH4.5前後)に伴う生育障害が発生し、収量が低下しました。このことから宮坂氏は、土づくりの重要性を認識し、水稻収穫後に牛糞堆肥・苦土石灰の散布を行っています。散布前に土壌分析をJAに依頼し、分析結果に基づいた適正量の散布を心掛けています。これにより、pH低下を未然に防止し、収量・品質の安定化を図っています。

(3) 施肥管理

肥効調節型肥料 (基肥一発型) の施用により安定的な生育量の確保に加えて、ほ場をこまめに観察し、降雨や降雪後でも生育に応じた施肥が確実に実施できる背負い動力散布機で適期に追肥することで収量・品質の向上を目指しています。

また、収量・品質の低下を防ぐため、倒伏の可能性があるほ場については、新たな対策として倒伏軽減剤の活用を検討しており、普及センターと協力して技術実証を行っているところです。

(4) 品質改善

排水対策をはじめとする基本技術の励行や、生育に応じたきめ細やかな施肥管理、また自家乾燥にすることでの品質チェックなどを実施し、品質改善に努めています。さらに適正pHの維持、地力の向上を目的に、近隣の畜産農家と耕畜連携を行い、ブロー付きの堆肥舎等で6ヶ月ほど攪拌され発酵した良質な牛糞堆肥と苦土石灰を水稻収穫後に散布しています。その結果、等級麦の品質はいずれの評価項目とも許容値を満たしたAランク相当であり、高品質の麦づくりが達成されています。

その他にも、100%種子更新、作業適期を逃さない計画的な栽培管理を徹底し、収量の高位安定化と上位等級麦の生産に努めています。

表 2 品質分析結果（令和6年産）

タンパク質 (%)	灰分 (%)	容積重 (g/l)	フォーリング ナンバー
8.7	1.45	832	376

(5) 労働時間の軽減

10a当たりの所要時間は約3.1時間（県平均4.3時間）です。ブロックローテーションにより麦の団地化を進めることで、作業時の移動時間短縮を図っています。毎日就業前には龍翔さんとミーティングの時間をとり、作業内容やほ場の確認を行うなど、一日の作業の効率化に努めています。

また、耕起後の降雨により播種作業が遅れることが無いよう、耕起・播種・除草剤散布までを1つの作業と位置づけ、1～2日以内に完了するよう作業計画を立てています。

赤かび病の防除はドローンを活用することで省力化を図っている他、収穫後は自家乾燥するとともに、一時貯留することにより、繁忙期のJAライスセンターにおける荷受け時間の短縮に努めています。



写真 2 播種作業

表 3 10a あたりの小麦労働時間

作業名	機械名	労働時間（分）
除草剤散布	ハイクリブーム	15
額縁明渠施工	リターンデッチャー	19
耕起	ロータリー	29
苦土石灰散布	ライムソワー	7
播種・施肥	クリーンシーダー	29
除草剤散布	ハイクリブーム	13
中明渠施工	リターンデッチャー	15
追肥	背負い動力散布機	17
赤かび病防除（2回）	ドローン	15
収穫	自脱型コンバイン	19
運搬	軽トラック	2
乾燥	乾燥機	9
合計	宮坂氏	189 (3.1時間)
	(県平均)	(4.3時間)

(6) 流通の改善、合理化

亀山市では、J Aの施設で乾燥・調製を行うのが一般的ですが、宮坂氏は乾燥作業については自家乾燥を行い、調製作業はJ Aライスセンターを利用しています。自家乾燥は、『乾燥委託費』の削減だけでなく、荷受けの順番待ちによる時間ロスがでないので、収穫作業の効率化、刈遅れの回避につながっています。また、生産物については、J Aを通じて、全量を県内実需者に出荷しています。

(7) その他

宮坂氏は、J A鈴鹿受託者部会副会長として活動するほか、担い手農業者代表として亀山市農業再生協議会の委員を務めるなど地域の中核農家およびリーダーとして、地域農業振興に努力・貢献しています。

その他、平成15年度全国豆類経営改善共励会で農林水産省生産局長賞を受賞されています。

4. 今後の麦作の取組み

さらなる収量・品質の向上を目指し、普及センターの技術実証に協力するなど新たな技術の導入に積極的に取り組むたいと考えています。

また、地域とこれまでの実績に基づいた信頼関係が構築されていることから土地利用調整を一層進め、新規雇用により労働力を確保し、栽培面積のさらなる拡大を目指しています。

令和7年3月25日発行

【編集・発行】

全農三重県本部営農対策部

〒514-0004

三重県津市栄町一丁目960（JA三重ビル内）

TEL：059-229-9058

【印刷】

伊藤印刷株式会社

〒514-0027

三重県津市大門32-13